

サクラエビ研究のパイオニア、中澤毅一（その3）

久保田 正

静岡県蒲原町の海岸の近くに「駿河湾水産生物研究所」を開設以来、毅一は昭和10年頃まで、著作に励むと共に地元へサクラエビの不漁対策の指導や研究活動を行っていました。以下彼が地元で携わった主な事柄について年代順に記します。

昭和3(1928)年:当時の水産講習所の練習船「蒼鷹丸」(202.4トン)に乗船しサクラエビの漁場調査に参加:近年のサクラエビの激減の原因についての研究発表。

昭和4(1929)年:県水産試験場の魚類誘致対策の指導を行い、由比川沖に人工漁礁の設置や多量の米糠・有機栄養物と砂を袋詰めにして海底に沈めた。

昭和5(1930)年:沼津の御用邸において昭和天皇に駿河湾のサクラエビおよび深海生物の標本を持参しそれらの説明。

昭和6(1931)年:サクラエビの不漁は、製紙会社からの放出の汚水が原因であると発表:県主催の郷土研究大会で「駿河湾産桜蝦の研究」の講演を行い、研究資料展覧会へ深海動物12点とサクラエビ属の3種を出品。

昭和10(1935)年:サクラエビの大井川方面への移動は、海水中の石灰分の不足であるとして、由比・蒲原の漁場を回復のため廃船にコンクリートや泥土を入れて沈め築磯の指導。

毅一は、昭和8(1933)年に非常勤講師だった東京慈恵会医科大学の教授に栄進しましたが、その後も不漁対策に協力しています。それ以外の最も重要な功績としては、古くからの知人で元教員の市毛金太郎が昭和9(1934)年に開校予定の当時の「清水商業女学校」の創立協力者の1人となっていたことが判りました。このことは、氏の書かれたものにはその記述も無く、後に家族によって編まれた「中澤毅一追憶」さらに人物紹介などにも全く記載されていない新しい事柄なので、その経緯について紹介します。

発足当時の清水商業女学校は、社会で活躍する職業婦人の育成を目的としていましたが、現在は、「清水国際高等学校」として静岡市清水区内にあり、男女共学校です。校訓は至誠、勤労、協和で、キリスト教の教えを基盤としています(図1、2)。



図1. 昭和9年創設時の教職員(校舎正面前)
毅一は着席の前列左2人目
(清水女子学園記念誌、1984より引用)



図2. 現在の「清水国際高等学校」の校舎の一部
(撮影 佐藤 武)

ところで、毅一と初代の市毛金太郎校長との交流は、校長が山梨県女子師範学校の教諭であった頃に中澤家の一部を借りていたこと、さらに富士中学校(旧制)の教頭の時、毅一の次男篤続いて三男護人が山梨県から転入学のお世話をしたことから始まりました。その後校長は30余年の公立学校で教育の場を離れるに当たって、私立学校の創設を志した時、毅一はその計画に協賛され、県の許可申請や土地購入や建築について尽力されました。当時、県の許可を得るために設立者は、不動産を所有していることが必要とされたので、協力者となったとされています。蒲原町に設けた研究所が無ければ、女学校の設立申請が出来なかったことも考えられるのです。

昭和9(1934)年4月5日に第1回の入学式では248名の新入生がありました。開校後は、理事の身分で教員として理科(生物)の授業を行い、クリスチャンとしての指導は、若い乙女達に正しい人間としての在り方を体得させ、その影響は大きかったとされています。